



サルゼ 第三リイドル序
 古言ニ云ク他人ヲ愛スルハ猶己ヲ愛スルカ如
 クス可シト抑天道ヲ恐レ慎テ人ノ人タル至誠
 ナ盡シ父母ニ孝アリ朋友ニ信アルモ畢竟皆是
 レ一ノ愛心ヨリ発セサルハナシ苟モ人ト生レ
 テハ須臾モ此愛心ヲ離ル可カラス若シ否ラサ
 ル寸ハ忽チ兇暴蠻野ノ域ニ陥リ昇倫交際ノ道
 頽然トシテ復タ立所ナシ是ヲ以テ世教ノ本旨
 ハ只天下衆庶ヲシテ勉テ此愛心ヲ養ヒ以テ徳

ハ57073

ニ進マシムルニ在ルノミ蓋シ此心ヲ養フヤ固
ヨリ脩身敬天ノ學ヲ講スルニ非サレハ其緼奧
ニ達シ難シト雖氏亦其意義ノ甚タ深遠ナルカ
為ニ幼童女子ヲシテ遽ニ之ヲ解セシム可ラス
故ニ此輩ノ読本トス可キモノハ所謂ル「リイド
ル」ニ若クハナシ乃チ「リイドル」ノ書タルヤ世ノ
善人物ニ觸レ事ニ臨テ其愛心ヲ發動セシ事跡
ヲ載タルモノ多ケレハ實ニ美事小話氏云フ可
キモノナリ是ニ於テ乎余「サルゼント」氏ノ著述

セル第三「リイドル」ニ就テ幼童女子ニ解シ易キ
者ヲ抄譯シ僅カニ一書ヲ成セリ今之ヲ童蒙讀
本ノ初編ト為シ繼テ同氏ノ第四及ヒ第五「リイ
ドル」中ヨリ抄譯シ以テ其中編下編ヲ充サント
欲ス語ニ云ク遠ニ行クモノハ必ス近キヨリス
ト幼童ノ輩此書ニ由テ愛心ノ一斑ヲ窺ヒ得ハ
遂ニハ其脩身敬天ノ緼奧ヲ窮ルモ亦何ツ難シ
ト為ンヤ是レ余カ此書ヲ編集スル所以ノ素心ナ
リト云爾

明治五年
壬申十月

松山棟菴
誌

ンサ
トル
氏ゼ
第三
リイ
ドル
目次

卷の上

雲の事うゑのこと 寓言うゑご

鍔沓の釘の事つばさのくぎのこと

黄金の嗅烟草入の事うごんのかたぐさいれのこと

加里布と織屋との事かりふとオリヤのこと

王と佞臣との事おうとねいしんのこと

土留古の僧と王との事とろこのかみとおうのこと

慈悲の心の事じひのこころのこと

高
三

胆氣の事

長者を敬ふ事

悪き言葉を用ひかたざる事

否と答ふべき学ぶ事

善き贈物の事

少女が奇特ふる行ひり事

森の覆盆子の事

巻の下

志邊里屋の女丈夫の事

氣高き心の威勢の事

良美由須の事

麻又列五留と良門土との事

金財布の事

自かゝ者みる事

富る人と貧しき人との事

酒を禁ト食を節する事

目次終



ンサル 氏ゼ 第三リイドル 卷の上

慶應義塾同社

松山棟菴

譯



雲の事

寓言

夏の暑さの頃一日朝よむれ或る海の邊より一
 點の小さき雲の立昇るて宛も稚き小兒の戯が
 如く飄然と青空小浮びけるが折しも長の早魁
 みて田畑ハ燥きて裂人と一草木も枯る計ふ
 り此時々の小さき雲ハ己が身小何の憂もな

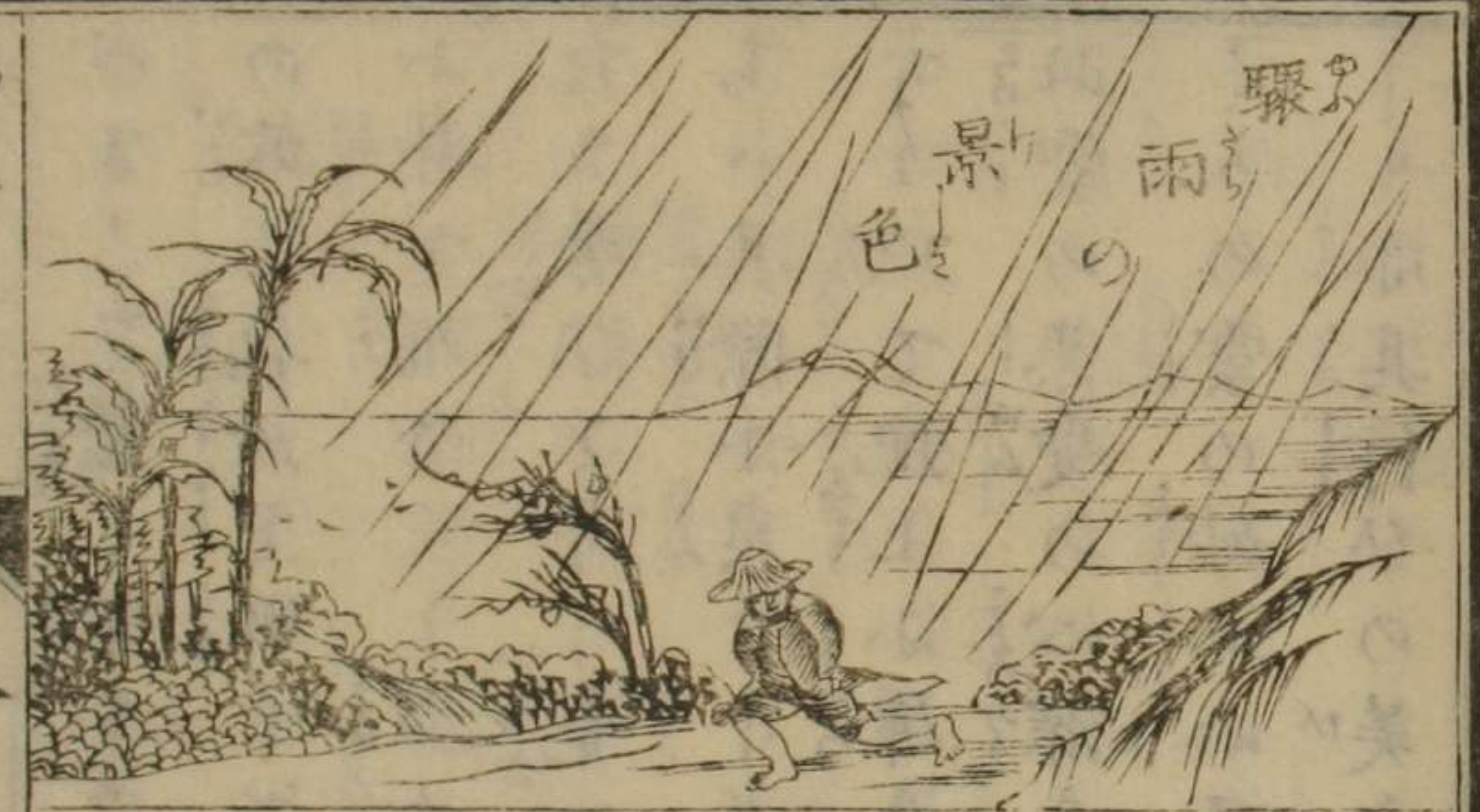
第三リイドル

卷之上

又何の苦もななく朝の風小吹をつ彼方此方
小漂ひて遙小下を見下せば額小玉の如き汗を
流したる貧しき百姓共の稼ぐ者なり此有様を
見て歎息の聲をふし呼我この貧しき百姓共の
苦を軽くし憂を除きて其飢と渴とを救ふべ
き小何れ一事の何れもやと云けるが頗て日
の漸く昇る小従ひ此雲の容も漸く大くなりて
人間の為小其一命を擲つべき程の志も亦益々
固くありたりされば地上の暑さハ更小烈しく

かりて日光の輝きハ恰も火の燃る小齊しく彼
の百姓共が田畑小稼ぐ其隙も流石暑さ小堪ら
ねて眩暈を覺る程かきど貧苦小迫る悲しき小
尚も稼を怠らむ折々腰を伸しつゝかの雲を仰
ぎ見てさも怨めしげなる顔容ハ實小憐なる風
情なり此時彼の雲ハ我百姓共を助けんと云つ
つ徐々青空より降来らんとせしが曾て此雲の
いと稚くして海底小降りし頃成長の後ハ一帯
の雲とかりて大空より立登るを得るとも再び地

上小近くかゝるバ必む死をとの話を聴しゆ忍今
 此事を憶ひ出し暫時の間猶豫して痛く惑へる
 様子なりしが竟小思案も一決し善を為さん小
 止まりて少しも惑ふ氣色なく更小大喝一聲し
 てかの百姓小告る小ハ汝地上小身を勞して甚
 だ疲きたり我今汝を助くべしと云つ彼雲ハ
 一念凝とる有様おて俄小其身を擴ろげ甚ど廣
 大とかりけるが斯く廣大の容小も有り得んと
 ハ自かと思案小も及をざる程の事なりし斯て



彼の雲ハ天の使の下まき
 如く大地の上小立ふさか
 且左右の翼を張出し燥け
 る田畑の上小臨み威勢を
 示すその氣色小地上の禽
 畜懼を抱き草木風小靡き
 たまども唯地上の人々ハ
 固より此雲の恩恵を興ふ
 る趣意たることを知たき

第三回 卷之十一
バさしと驚く者もなかりあり却説再び彼の雲
の云く我汝を助くべし汝我を迎へよ我汝が為
小身を殉さんと益々其大なる志おて勇氣凛々
たる勢ひをなす電ハ彼が身を穿ちて閃めき雷
ちハ其際小夷さしぐ忽ち碎けて一陣の驟雨と
なり以て地上小厚き恩澤を與へたる有り實小
此雲の悲愛の心深きを思ふべし右の驟雨ハ全
く々の雲の妙工おて假令其為小彼が死を致せ
しも亦其行ひの美かたきや又遙小地上を離さ

天上の日光小よりて美麗玉の如き虹霓と大空
小画きしハ所謂身を殺して仁と為るといふ
愛情の別を告る微いふるべしさるふこの虹霓
の如きハ忽ち消て其痕をも見ざりしぐ雲の助
けし地上小ハ尚も久し其恩澤を被りしと我
鍍香の釘の事
一人の百姓有り或る日市街小出て若干の穀物
を直段よく賣拂ひ其金子を財布小納めて熟ら
自から思ふやう今直小家路小就て急ぐありバ

必^{かな}日^ひの暮^くさる内^{うち}小^こ吾^ご廬^い小^こ達^{たつ}とべーと因^よて自^{みづか}
から馬^{うま}小^こ跨^{また}り彼の財^{ぜい}布^ふとも馬^{うま}の背^せ小^こ負^おせ家^{いえ}路^ぢ
とさして立^た去^さりてガヤグヤて午^まの刻^{とき}頃^{ころ}小^こ一^{いつ}の村^{むら}
里^{さと}小^こ至^{いた}きバ暫^{しば}時^{とき}の間^ま小^こ憩^{やす}まー又^{また}此^{こゝ}處^{ところ}を去^い去^さら
んとて馬^{うま}を引^ひ立^たしとき一^{ひとり}人^{ひと}の馬^{うま}夫^{こゝ}来^きり其^{その}姿^{すがた}を
見^みて足^{あし}下^{した}の馬^{うま}ハ左^{ひだり}の後^{のち}足^{あし}の鍔^{つば}杏^{あん}小^こ一^{いつ}本^{ぽん}の釘^{くぎ}枝^え
たりといふ百^{ひゃく}姓^{せい}答^{こたへ}へて其^{その}義^ぎハ棄^{すて}置^お給^{たま}へ吾^ご家^{いえ}へ
ハ九^{こゝろ}そ二十^{ふたじゅう}里^りの路^{みち}程^{ほど}ふとど此^{こゝ}鍔^{つば}杏^{あん}ハ大^{おほ}丈^{さか}夫^ぶ子^こ
るべー我^{われ}ハ甚^{おほ}ど心^{こゝろ}せきかりと云^いひつゝ家^{いえ}路^ぢ小^こ

出^い行^でたり此^{こゝ}日^ひの午^ま後^ご小^こ及^{およ}び一^{いつ}頃^{ころ}の百^{ひゃく}姓^{せい}ハ馬^{うま}
小^こ秣^まりもんとて再^{また}び馬^{うま}を駐^{とど}めて或^{ある}は旅^{りょ}籠^ご屋^や小^こ
腰^{こし}を打^う掛^か居^ゐたる小^こ折^りしも又^{また}厩^{うまや}の廝^し卒^{そつ}来^きり其^{その}姿^{すがた}
と見^みて足^{あし}下^{した}の馬^{うま}ハ左^{ひだり}の後^{のち}足^{あし}の鍔^{つば}杏^{あん}小^こ一^{いつ}本^{ぽん}の釘^{くぎ}
枝^えたりいざ我^{われ}鍛^た冶^や屋^やで此^{こゝ}馬^{うま}を牽^ひき行^ゆて鍔^{つば}杏^{あん}
の釘^{くぎ}を打^うせをやといひひきまバ百^{ひゃく}姓^{せい}答^{こたへ}へて其^{その}義^ぎ
ハ棄^{すて}置^お給^{たま}へ吾^ご家^{いえ}までハ最^も早^{はや}六^む里^り計^{けい}なり此^{こゝ}馬^{うま}ハ
其^{その}路^{みち}程^{ほど}を行^ゆく小^こ差^さ支^しへふらるべー我^{われ}ハ少^{せう}も時^{とき}
刻^{とき}を移^{うつ}し難^{がた}しと云^いひ捨^すつゝ馬^{うま}小^こ跨^{また}り出^い行^でりガ

其處より總の路を行く頃馬ハ俄小跛とやうて
屢々跌き遂小横さよふどりと倒きて一本の足
を打折たり斯て此百姓ハ何と詮方何とされば
路小倒せし馬と打もて金の財布と己ガ脊中小
負ひ徒歩ふて道を急ぎしが漸く夜の深る頃始
めて吾家小歸ると得たり此時獨り自かゝ歎息
して云く我斯る難儀小逢たるも必竟唯一本の
鍔杵の釘と等閑小せし故と
黄金の嗅烟草入の事

一隊長曾て配下の士官を集めて俱小飲食を為
せし時其頃新々小求めたる小や極麗しき黄金
の嗅烟草入を出し之を空中小吹聴して頗る誇
る色何りしが良けりて隊長ハかの嗅烟草を一
捻を用ひんとて己ガ懐中を探し小不思議小
も嗅烟草入の何とぞをけきバ心大に驚きたる
体小て士官等小打向ひ余ガ嗅烟草入ハ如何せ
しや若し足下達の内誰か誤りて懐中せし小
ハ何とぞやと云けとバ士官等ハ皆一時小其席

と立ちて各懐を開きたるもど更ふ喫烟草入ハ見
 へざとけり此時一人の旗手のと始より其席を
 動りざして何う心の安りたざる様子おて空中
 の人お向ひ我固より喫烟草入を掠めたる覺お
 一こハ吾名聞お預る一言ふれバ強ち懐を開
 ともよろるべしと云ひけきバさして詮儀の仕
 方もあく彼の士官等隊長の宅を辞し去るとさ
 人々互お相點頭き旗手を目語して必も今日の
 賊たし人といへや斯て翌日お及び隊長ハかの

旗手を呼寄いひけるハ昨日見失おひ一喫烟草
 入ハ全く余が粗忽おて其後見付おせりその仔
 細ハ余が懐の蔵包の内お一の孔ろろしゆ忽其
 裏より縫目の中お落込たるものと見へたり扱
 又汝ハ昨日何故お餘人の如く懐中を開くこと
 を拒しやと問おきバ旗手答へて此一事ハ唯貴
 殿おのり敢て語るべし吾兩親のいと貧しきガ
 故に常お我給料の半を贈りて養ひけきバ吾食
 事おおぬて未だ温りたる物さへも食ふこと能

昨日ハ偶々貴殿の饗應不預と一事をば
吾食ふべき食物を竊し懐中して吾両親不贈
と欲せしなり然る不若し懐ろを開きて其食物
を坐小落さば我豈愧おまを得人やと志むぐ物
語をけきバ隊長ハ之を聞て大不悦び掌を拍ち
一聲を發して嗟汝ハ誠の孝子と謂ふべし今日
よりハ汝吾家の食椅不就き日毎の食事を取ら
るべしされバ汝が兩親を養ふ不亦少しハ容
易かるべしと云へて其後隊長ハ嚮の士官等を

再び饗應不招きての旗手が無實の罪あり
ことを詳く小説明し且其證據として夫嗅烟草
入を取出して手から之を旗手不與へしと我
右の旗手なり者自ら顧みて一の私曲なく又
一の鄙劣あまや知らば毫も心を惨る不及バ
ぞ何ぞ潔よく其懐を開きざりしや若し斯の如
くあるは却て其行を稱すべきなり凡そ人たる
者ハ粗食を喰ひ襦袢を衣るも己が力と合ふ所
不て正路不得たる物なりバ假令他人の之を認

め知るとも決して恐ることふるべし

加里布と織工との事

往昔馬具達篤の都ふ加里布と云へる君は
當時の世界小名も喪く計ふる洪大美麗の宮殿
を造りて住けるが此宮殿の門前ふ古き一軒の
草舎有りて八年老たる貧しき織屋が住居なり
此老人ハ日毎小自かか機を織り絶の金錢を設
けて其心小満足一錢の借財もなく聊々苦勞
もなく人をも猜まざ人をも猜まざることふく

安樂に我其日を送りける叔この老人の草舎ハ
王宮の門前ふ有りて甚と見苦しきがゆゑ小王
の宰相ハ遠慮會釈もふく之を取毀ちたく思ひ
なきと加里布の意ハ然らば若し之を取毀たん
とあるバ先其主人小談合し相當の價を拂ふべ
しとの命を下せり是故小かの宰相ハ織屋が宅
小到り若干の金子を出して家の代金を拂ふべ
まれば速小住居を移すべしとの義を説き勧め
たりさきども老人ハ絶て納得の氣色もふく答

へて云く其金子ハ受るやうなりまは故小収め
給へ我用ハ此機を織りて得る所の金子をもて
猶贏るなり我ハ此家小生きたり吾父ハ此家小
て死せり我亦此家小て終らんことを願ふふま
バ此家を譲ること能はざといひひりルを宰相ハ
之を聞き怒の顔色小て云けるハ汝が草舎ハ吾
王の宮殿小間近けまバ日常吾王の御目障り小
し汝若し頑固小して此家を立去むとわらふバ家
の代金をも興ふる小及まほこの愚を追拂ふべ

しと老人の云く王若し好んで吾身を遣拂ひ吾
家を毀人とわらふバ何ぞ難からんやまども王
若し此事を為バ我日々吾家趾の礎上小坐して
痛く歎き悲むを見ん斯の如くせば王の寛仁小
る心小於て吾零落せしを見る小忍びざること
も何らんかと答へけま宰相ハ之を聞て大小
憤り立去りて直ち小王の御前小いで彼の輕卒
ふる老人ダ罪を鳴し其家を毀べき允可何らん
ことを乞へる然まども王ハ此事を固く許し給

ハを宰相さむらひハ云いるやうやう汝みづか宜かしく我われ余をを費つして老らう
人ひとガ家いえを修しゆ覆ふくまぐ一ひと尤さもルハ余をガ名な譽よも必かならむ
彼かガ家いえと共ともハを傳つたへて後こう世せの人ひと余をガ宮みやう殿てんを
見みルハ余をを稱しやうして大だい王わうなりと云いんら又また顧くわんと
て織あ工や草こ舎やを見みルハ余をを稱しやうして正せい義ぎなりと
と云いんら

此こ王わうハ始はじめより一ひとの曲まが事ことをも行なふを嫌きらひ其その宰さい相さう
ハ既すでハ織あ工やガ通つう義ぎを奪うばはんとせしむる斯かくる君きみ臣しん
小こかおて孰たれを賢けんと一ひと孰たれを愚ぐとをりや黙もくし
て知しるべきべきの事こと

王わうと佞ねい臣しんとの事こと

往昔むかし獅し々々里りの君きみハ治ち鬼き志し須すといへる人ひとハ鉅きよ
萬まんの富とみを重おもねて衣い食じ住ぢう共ともハ榮えい耀やう榮えい華かを極きまめた
きども只ただ心中しんちゆうの安あん樂らくの事ことハ未まだ之これを覺おぼへざり
一ひとガ其その佞ねい臣しんハ太だい茂もう九く列れつ須すといへる者ものハ或ある日ひ
王わうの御ご前ぜんハ小こいいでい云いけるハ大だい王わうの如ごとき幸さい福ふくハ
君きみハ古こ来らい未まだ聞きざる所ところなりと王わう之これハ答こたへて
云いく余われガ幸さい福ふくを左さ程ほどハ結けつ構こうと思おもへるなりなりハ其その

幸福ハいふなりものり汝今試そ小余も代るの
意ふきやと宜へば太茂九列須ハ大小喜びて王
の意小随むことを願へば扱治鬼志須ハ臣下小
命トて王宮の正殿小饗宴を開き太茂九列須ガ
為小王服を着せて金銀を鏤めたる椅子小坐さ
しめ棹子の棚ハ數萬金の値もあらずき金銀
の器を陳ね且此饗筵ハ薫油を具へ花を飾り
香を焚き食盤中ハ山海の珍味を尽し數多の
美人小命トて太茂九列須ガ給仕を取らしめ一

一彼ガ意小従がしめたり斯て太茂九列須ハ
意外の歡樂を盡しつゝ自かゝ昇天せし心地小
も成て其饗宴小現をぬき居たりしが斯る
幸福の際小當て不圖天井を仰ぎ見きバ危殆
ふる哉一條の髪の小毛をもて大なる杖身の劔を
倒しす小釣り下げて今小己ガ頭の上小落人
とる有様なり太茂九列須ハ之を見しより心
大小恐怖して喜びの真を醒し彼の窈窕たる美
人の前後を擁ると雖ども金銀の杯盤煌々と

して坐上を照ると虽ども山海の珍味前小陳ね
たうと雖ども一として太茂九列須が愉快を取
る小足らど終り食盤の上小手を進るさへ小恐
き慄きつて自かた立て王服を脱ぎ去り王は謝
して云く臣斯る危ふき地位小あつては假令此
幸福を受るも意なりとて又其従前の賤しき身
介小復らんことを懇願せしとあり
右の趣向小て治鬼志須ハ假令巨萬の富を重ね
王位の貴き小居て名譽を得ると雖ども其王た

る小ハ斯る苦難を免きどとの意を暗小示せる
あつべし

土留古の僧と王との事

土留古の國小一人の僧り曾て韃韃の國小旅
行せし頃或る日旅籠屋と取違へて國王の御殿
小入込たり暫時行て左右を顧みる小長き廊下
りまばらう小て脊負たる包を卸し毛氈を敷て
其上小憩るとせり斯てりける内忽ち番兵
之を見附て汝此處小て何事を為そやと問ひけ

きバ此僧答へて我この旅籠屋小一宿せんとて
来きるなりとゆふ番兵等之を聞て大不怒王此
處ハ旅籠屋小一宿せ勿休なくも國王の御殿
れバ急き立退べいと呵王けるが斯る折しも偶
其王躬かゝ此廊下小来てて彼の僧が取違へて
らゝ小来きるを冷笑ひつゝ汝ハいり小愚鈍
きバとて我宮殿と旅籠屋と見分ざりハ何
事ぞやと詰りけきバ僧の云く願くハ大王寛仁
なりきバ暫時猶預して愚僧小一二の箇條を問

め王へ元來始めて此家を建しりハ誰が住居
せーや王答へく云く余が祖先なりされバ先頃
もであゝ小住居たる人を誰とらるや王答へく
云く余が先君なり僧又問て云く今日誰が住へ
るや王の云く余自かゝ住へせされバ大王の後
ハ誰りころ小住ふべきや王の云く余が太子
り僧之を聞て歎息し嗟一の家小して斯く屢々
其客人を異小絶間なく之を迎るときハ果
て宮殿小一宿せ即ち旅籠屋なりと云

慈悲の心の事

初留利亞武と返里といへる二人の童子は冬
の日雪風寒き枯野の遊び小出行い其路をダ
ラ降り積りたる雪の中小見馴ぬ人の打伏して
熟くも能睡りたる体なり初留利亞武ハ之を見
て痛く憐みの心を生じ斯る寒き風小晒さきて
野路の上小あつんハ露の命の争でやたやう
ちとと思ひ卧たる人の傍ら小寄て其睡を喚醒
さんと幾回も揺り起せども更小覺もなき様子

かり返里ハ之を見て微笑ひいて云けるハ君ガ
好事ありと思ふ儘小揺り起さんもよけきどさ
りとして何の益あり此男の酒小酔たるを知ら
ざるや棄置き給へ素より蔡の心配も筋小も
ろとト免も角この寒風小てハ手も麻痺たる如
くなきバ早くも共小路を行よ若トといひりれ
バ初留利亞武の云くされバとて今此人ハ痛く
凍へて将小死んとせり返里の云く其将は死人
と見るハいとより理の當然なり彼連も本酒を

吞べき身の責ハふらる
 べし初留利亞武の云く
 呼人として誰う常小誤
 己を死と得んや又誰う
 他人の慈悲を仰がざら
 んや彼が假令今酒小酔
 たりとて之を打棄て顧
 ることなく其死小陥らむるの
 理何んや返里の云く君ハ六ヶ鋪



理屈を述べ給ふものうか我ハ此處を立去るべ
 し最早この寒風不堪がさし君も我と共に去る
 の意なきや初留利亞武の云く君若し此處を去
 らんとすば君が意小任まばし我ハ假令彼の
 人の不行跡ふるふよりて其人物の賤しきを知
 るといへども亦成丈の力を盡して彼が一命を
 救えんと欲するなり我能く吾務むべき所を知
 き去る小忍びどといふ返里ハ之を聞て心小
 憤りたる体小て此處を立去まり斯て初留利亞

第三リイドレ 卷之上 二十

武ハ獨ひとり後のち小残のち一ひとが曾さうて聞きくハ雪ゆきハよく風かぜ
を防ふせぎて又また人の命いのちをも保たもつべきものとつこ
と不ふ圖と思おもひ出でたきバ先まづちの雪ゆきを搔か集あめ
て彼かのの卧ふたる人の身みを覆おほひ斯かくして後のち何なに卒つひして
擣きを得えずなく思おもひけるが間ま近ぢか小村むら里らはきバ
其方そのほうへ馳は行りく小幸こさいひ深切しんせつなる一人ひとりの百姓ひやくしやう小出こで
逢あひて事ことの次第しだいを物語ものごとせり此こゝ百姓ひやくしやうハ早速さつそく小
擣きを出いして初留はつりゅう利亞武りやぶをのせ之これを引ひいて彼かのの雪ゆき
の中うち小伏こふしたる人の畏おそれ小行こぎき初留はつりゅう利亞武りやぶと兩人ふたり

小こて其人そのひとを擣き小乘こせせ之これを引ひかかす最寄さいきの家いへ小
到たうり織理おりのりの粗こき手拭てぬぐいをかりて彼人かのひとの層かさねへを頻しき
り小摩こま擦すりけきバ忽たちまち蘇よみがえて人事じんじを省くわるる小至こし
まり斯かくて其人そのひとハヤグて死し小向おんふんとせし様子やうす
を聞きて大おほ小驚おどろき自みづから深く心こゝろ小感かんと初はつめて已お
が不行ふぎやう跡あとなるを後のち悔くわんし其後そのちハ意いを決くわして堅かく
酒さけを禁きんと生涯しやうげんこの禁酒きんしゆの戒かいを守まもり更さら小志こしを改かへ
めて其行そのかみハ正ただしかりけきバ自然ぜんぜん人ひと小も尊そん敬けいせ
らき又また人の信用しんようをも得えず至いたり斯かくまり後のちハ折あり

少一の手土産を携さん初留利亞武とりの百姓
との許小来まで厚くむっ一の禮を述べるとい
ふ

胆氣ある事

凡て危ふき難小罹り又ハ恐ろしき事小出逢と
も心の慥ふしを動ぜざるハ甚ど大切なりこと
なり心慥りなきハ其事小驚き周章して却て危
ふさを増す方どの患ひなく斯る場合小差臨も
て人たるもの為べき上策をも必を得るもの

かり今其一例を舉人小合衆國の邊志留馬仁屋
洲小於る馬留知蒙苗郡と曾須幾半那池との間
ある蒸氣車道小ハ與留久の南凡そ五里許の處
小ト子ルズレダーと云ふ橋あり彼の一千八
百五十五年の頃此橋の出火小て焼落たりと
里武といへる齡ひ劣り小十二歳の童子ハ其働
小よりて心の慥なることを現ハせり乃ち此日
の朝九時頃ハ彼の橋の木組ハ全く焼落たりこ
の火事を見物する者二十人許小て里武も其中

ふりりーが獨り心ふ思ふやう新興留久をさし
て行く所の蒸氣車ハ今ふもろく小来る人ー若
し之を留めざれば橋の焼たる火の坑は落ちて
數多の人を損もんハ必定あり扱ハ其蒸氣車を
留人として足小任せて馳行ーが此橋より二百ヤ
ード一ヤードハ九許隔てて鑛道の廻り角
の裏小到る向ふる方を眺むきバ果して此方小
向ひ飛が如く蒸氣車の近き来るを見たり此時
里武ハ又思ふやう常々意根悪き小供等が何う

鑛道小異變のりりげなり真似をして屢々蒸氣
車の器械方を欺むきーこと何れ今我之を知
らせん小も又例の意根悪き小供の仕業うと思
て是ふハ器械方の車を止るよ心を用ひざるや
も計難し左も是ハ非常の仕方なりとハ叶ふま
トとして自か々大胆小鑛道の中央小け込と両
手を揚て器械方小車を留よと云ぬ斗の手語を
ふーつ、真直小車の方小向ふて息をも継どか
け行ーが器械方ハ斯う危ふき有様小て稚き童

子が来りを見附急小
 器械の螺旋をうへ車と
 留めて遽しく何事の
 ありやと尋ねも
 ハ里武ハ息をも継
 げへぞ只橋が焼落
 たりと云ふ俛小器械方
 ハこれを見てす
 橋が焼落たるかとい



ひつゝ大に驚きたる様子あり一がこハ固より
 相違もなきことあきバ既小蒸氣車の打碎けん
 とせり大災難を終り四百ヤードの真間ふて
 運よくも道きたるハ全く里武が働かりを聞き
 此橋が焼落たり橋が焼落たりと口々小叫び
 けき其聲前車より後車小傳へて乗組の客ハ
 俄小銘々車より飛び下りて斯る大難を免れ
 たりさるハ全く天の恵なりとて人々皆里武を
 命の親とも敬ひ即坐ふ多くの物を與へて其大

恩を厚く謝したり又此蒸氣車の社中よりも里武小金百圓を贈りてや

右の如く里武ハ彫りき褒美を得たる小尚彼が行ひを賞するものなり其仔細ハ彼自の顧みて斯く數多の人命を助けたりと心の中と思ふ
こぞいと心は快なりものなりとあり

長者を敬ふ事

希臘の都亞然須小おねて國家の譽ふとしていと賑も一き祭の真行なり一とき一人の老先生は

是れ此祭の見物小出揃り折郎たり時刻の晩きたれハ其年齢と人品と小相當りき機敷ハ皆已まふさがりたり此時年若の人達ハラの老先生が雜沓の中にて難儀さる途方小くきたる体を見附て先生も一葉が機敷小来り玉とて如何やうとも都合さる一との手語をかりける
ゆゑこハ喜りやとかの先生ハ羣集の人を押分て急ぎ其處小行けば案小相違のこと小て此若き人達ハ只竊々と嘲り笑ひつゝ互小間近く

席を占めて老人の坐まき場鬼もちり多き其
人の益々困却を容子まを衆人の見世物とも
成たる有様なり斯て亞然須人の棧敷ハ賑ひ
の真ふりかきて有りける此折しも又他國人
の為小別段設けたる棧敷はハかの老先生ハ
途方よくせり詮方よくも麻瀬戸文人の居
る棧敷の方小到り此都人ハ亞然須人より
も尚教育の届らざる者なりとも此老先生を見
て尊敬の礼を尽し各席を譲りて其間小坐せし

めたりされバ流石の亞然須人も已に都人の不
善なる行ひ小引りへ麻瀬戸文人ハ徳行の高き
を見て忽ち其心小感服し一度小聲を揚げて麻
瀬戸文人の行ひを稱したりこの時老先生聲を
勵よして亞然須の人ハ善の善たることを知る
者ありさきとも麻瀬戸文人ハ其善を实地小
行ふふことを得る者なりといへり

悪き言葉を用ゆべか多き事

少年の輩ハ凡て物事小全く不相當の辞を用ひ

或ハ苟カウ小コも不敬フケイの語コトを吐ツ盡ツクカクバ汝ニ不敬フケイの辞ジ
を用ヨウ申マウセバ其害キガイの多オホきことを知チざるヤ斯カる不
敬フケイの辞ジハ必カナラま汝ニ々カ記憶キキョウ中チュウ小止コトモより是コトバ後ノチ来キ決ケツ
て之コトを除ノクき去サべりト少年シヤウネンの際キ若カし不敬フケイの
辞ジを用ヨウ申マウセバ成長セイチャウの後ノチ小至コトモり自ミカク痛イタく後悔コウカイ
して忌イ々カ嫌キライふ程ほどの辞ジ小至コトモりも知チを識チ之コトを用ヨウふ
ること屢スズクありこハ皆知ミタカき時トキより用ヨウひ慣ナれたる辞ジ
小至コトモり喻ヨへバ恨ウラミの忘ワスレる人ヒトカクさスるガ如カくツつ迄マデ
も記憶キキョウ中チュウ小止コトモより是コトバ汝ニ々カ汝ニ常ツネ小意コトモを用ヨウひて成ナ

夫ウレ褻セツ々カ一ヒトき辞ジを避アワるトキハ後ノチ年ネン小至コトモりて臍シを
嚙カの悔クハあり人ヒト一ヒト嘗カて一ヒト善ゼン人ジンたり偶オウ病ヤメ小懼コり
其コト為ナリ小謔セツ語ゴを發ハツして惡アクむべきの辞ジを數スズク々カ用ヨウひ
し事コトあり此コト人ヒトの病ヤメ恢復カフクせし後ノチ小至コトモりて其コト實ジツを
告ツケげば其人コトモハ謔セツ語ゴ小至コトモりひたさる辞ジハ皆スベテ少年シヤウネンの
年ネンの又マタ一ヒトきを經スるとも已マデ小記憶キキョウ中チュウ小止コトモりて
我心ココロ小之コトを制セせざるバ再マタび口クチ舌ゼツ小現アハるモノ
たることを始ハジめて悟サトりたり哉ヤ

少年の輩若し自かた誤りて不敬の辞を用ひん
とまらるゝ或ハ他人の之を云ふを聞こと何とバ
右小記せる一例を思ふて之を避ざるべかたを
凡て善かたさることを知るハ人の智小ハ何と
ざるなり

否と答ふべき成學ぶ事

凡て事小臨して否と答へむ小ハ大智ハ勇氣の
決断ありるべかたを若し否と答ふべき時は當
りて速やう小否と答ふるときハ其身小かぬて

面倒を省くこと多し抑汝が幸福と汝が誠実と
汝が身と重んぶる心とハ皆悉く意を決して否
と答ふる氣力あり小由るものなり今汝が友達
来りて汝が心小不善と思へる樂を共小せん
と一或ハ其遊びを勧ること何とバ必む剛き心
小て速う小否と答ふべし然るときハ再び之を
勧る者ふしされども若し最初の答ふ小因循せ
バ切々勧めらるる遂ハ之を否と得てして其意
小従ふ小至るべし斯く自から決断せし自かた

その本心小背くときハ悪を拒むの力を失ふて
事々物々皆人の誘引小従ふ様小なるものあり
除世布といへる少年ハ兼てより能く決断の心
を養ひ何等の不善小ても己小云拭る者何れハ
瞬く間も因循いんじゆんたることなく直ち小否と答へく
少しも他を顧みざりしゆ其友達も決して除
世布の許小来りて不善小誘ふ者ありしとぞ
こハ除世布じよせふの如く意を決して速う小否と
答ふることを得るハなり斯て除世布じよせふが両親も

其子の否といふべき答の筋を能く學びてより
ハ最早不善の道小誘をもんことの恐ふけきハ
如何様の是小ても除世布じよせふが意小任せて行を許
せり斯の如きハ子を思ふ親の苦勞を除きしも
の謂ふべきなり之小反して列由辨といへる
少年ハ如何様の人小も事々物々先方の人の意
小愜こころをんことを欲せしゆ誰小對しても否と
答ふる勇氣なく只唯々とのといへ故小一と
して不善の誘ひを拒むこと能く必竟惡しき

文達ふ勧めらされて吾為べかざざる事をもち
常ふ己が難波を致せり夫故列由辨の両親
ハ日夜その子の悪しき路ふ迷ちんことを恐
て暫時の間も膝下を離し得む大お父母が苦勞
の種とハかきまうこれ全く列由辨が心弱くして
否と答へ能はざるが為ありしと我
少年の輩常々否と答ふべきこと成能く學ぶ
一若し否と答へんとまきと汝が舌強まりて言
得ざること何れに獨り人かき思ふ行きて否々

否々と幾回も反覆して否といふ辞を速し因
循せしめて明白にいふこと成云習ふべし何事
も依らば吾心小悪しと思ふ事を人の勸むると
き勢ひよく直ち小否と答ん小ハ常々己が口中
ふて否て小辞を發さるべきの用意をふし置べき
なり然れども又事ふりてハ諾と答へざる人
うらむと喻へば他人小施さんこと成勸る者何
て之を與ふるも彼と我との間小わか人たる
の職分小害なりさ時ハ諾と答へて否て小辞を避

べきなり

善き贈物の事

近き頃合衆國の或る都小出火つて其火の勢
ひ殊の外強く折しも冬の事やまば風烈しく寒
氣厳しくて龍吐水の水でも忽ち凍とけり程
ふまば火の鎮よる迄小ハ數多の家蔵を焼き落
し目前住居を失ひ人々其近村小寄りて假
の住居を需めたり又此火事の烈しき最中おも
老人小供ハ途方を失ひ我家の黒烟を後小見捨

て只管他人の慈悲を抑ぎ望めり姿こそいとく
憐なり叔この不慮の天災小逢たり不幸の人々
を救えんとて世小善人も多し里々の中小
も此都小住つ一人の法師ありてりの類焼人
の為小ハ様々の周旋をふし又此時の事情を新
聞紙又認めて偏く世間小示せしゆ名彼人達を
助けんとて或ひハ金子を贈り或ひハ食物を贈
るもの音近き傍の人のとやうど遠き里の人
やでも多少の贈り物をどすしけり斯て彼の法

師ハ數多の金高を募り得て火災を受たる人々
を賑ふ一己ガ善心の満足を致せりそぞ又爰ハ
贈物を為したる者の中ハ一人の童子あり劣ら
小銀六セント一銭ハ同ト古き上着一枚
と外ハ林檎一籃と携へ来りて云く我こたひ
類焼人の為不多くの物を贈らんと欲をせども
心ふよりせむ此品ハ聊りたきども我思ひの充
分なり既ハ吾妹ぞふも此事を嘲り笑ひたきと
若し衆ガ如き多くの童子ありて少一の品ハて

も銘々小携へ来らバ其高頗る多かりんと思ふ
なりとありも色バ彼の法師ハ之を聞きて童子
ふ云るやう汝ガ為る所ハ人を恵むの道ハ叶へ
る假令其贈物の輕少なりも之を與ふ小聊
うも耻ること勿き若し其品汝ガ力ハ合ふ程ハ
して本より慈悲の心より之を與ふるとは誠
の善き贈り物と云ふべきなり世の人々夫の塵
も積も色バ山とかりの諺を知らて今汝ガ為
る如く各其力の及ぶ丈の善心を尽さバ假令其

物の輕少やうとて赤面の色をく之を興ること
を得べしとあり

少女が奇特なり行ひたりし事

近頃の話なるが佛蘭西の里園にて或る貧しき
家の娘蒸餅匠の店にて一片の蒸餅を竊しお
ポリイスの者之を捕へて引立行んとせしが此
有様を見んとて數多の人々彼娘が周圍に群
集しけり此中お呂須といへり一人の初ま少
女あり此時丁度學校より我家へ歸らんとして爰

ふ来合したるが彼娘の捕とかりいと難波なり
趣を見て不便の心を起し群集の人を押かて捕
またり娘お近づき貴嬢の爲なきバ何事なりと
も吾身お叶ふ事を爲さやといひけりバ彼娘ハ
之と顧みて妾おハ両親と二人の稚き弟ありて
皆食物おも乏しく殆んど飢て死んとせりと其
物語も果ぬうちや「ポリイス」ハ囚人を追立
行なりお呂須ハ辛ふとて彼娘が両親の名と其
住居とを聴を得たり斯て呂須ハ其娘ハ不幸ハ

上も差當たり其身の難儀と思ひやりは
 いと悲さふ堪ざまば暫時茫然とて居たり
 が良かりき自かと思ふやう彼娘が純々一守の
 蒸餅を竊と一も全く親兄弟を助けんと志よ
 に出たりあつんさきば斯る貧苦を救ふ人と思
 へども其日ハ折悪く呂須も母も都外へ行て留
 守せし誰ふ計らん術もなく兎やせん角やと
 獨り思案を回らば折柄不圖思ひ付き事あり
 たり趣向ふて金子の工面をふり得たり其仔細

を尋めまば呂須が家の近き邊より一人の剃頭
 師あり曾て呂須が頭髪の髷をきば見て頻りに
 小譽めつて戯まて云ふハ若く貴嬢が髪を切
 るなりまば金五圓ふて買取るべし我其髪をもこ
 鬘を作したく思ふやうと此事を聞けり
 ハ平生其髪の髷をきき小誇りしが今ハ却て己を
 棄て人を救ふの術とハやうぬさまは呂須ハ真
 直小剃頭師の許ふ到り嚮ふ吾髪を断るやら
 バ金子を與ふるとの事やういされバ只今吾髪

を残りて切取て約束通の價ひを給るべしといひけむバ此剃頭師ハ固より其心甚ど深切ふて智恵有る者やまバこの言を聞て大に驚き貴嬢が邊小髪を切らんと云ひ給ふハおれも亦何故やうやと尋ねるまバ呂須ハ容易く云々の事を物語きバ剃頭師ハ深く其志一と感トて覺へてあつぐと涙を流せし斯て金三圓を出し呂須小與へて髪を切ことハ今日おも限るよしト後日復吾家小来て給へといひまきバ呂須ハ己が趣向

の成就したるを喜び一札を述て其家をいで肆店小往きて種々の食物を買調へて一の籠小入を彼の蒸餅を竊し娘の父母小恵よんとて路を急ぎて馳行けりされバ呂須が姿ハ髪も乱きて麻の如く肩小垂き惑錯と氣も衝逆しよろし類面の色さく紅よりやうくと彼の貧者が許小尋ね到てまびき草舎の扁を叩けバ夫婦の者ハ見知らぬ小娘一来たるを見て不思議とや思ひけん又驚きたる体なり此時呂須が云けり小



其許の貴女ハ恐らく
 今日歸て王をさる人
 一さそとて心を痛め給
 ふお貴女ハ云々の事を
 妾小告たはまバこの食物
 を持参せうといひつ
 願て呂須ハ残り金子
 を老人の手小渡し心小
 満足せしども又此屋

の様子を見て怜み思ふ面
 顔みて戸外をさして
 出行まり斯て呂須が未
 だ吾家へ歸らざる内彼
 の剃頭師ハ其家小到せ
 小折よく呂須が母も
 歸して内小在りまはバ
 云々の事を委しく告
 るお母の喜び大方やど
 やがて呂須も歸りけ
 きバ其母両手と舉て娘
 を迎へつ今日行ひ
 を譽めしうバ呂須が心
 小も満足せり又りの剃
 頭師ハポリイスの屯所
 へ行きて呂須が舉動の
 殊勝ふること話せし由
 名蒸餅を竊きたる娘

もさしたる罰を蒙らむ唯當然の呵を受の
 ミふて刺さく罵く善き道を諭さきて其罪を免
 ききたりこれより後ハ又壺間の人々も彼の貧
 人を恵む者多かりき色バ日なりとぞして彼等
 身も亦健々となり安樂ふ世と渡りハ全く呂
 須が思慮深き慈愛の行ひよ由りもねとぞ
 森の覆盆子の事
 老年の兵卒曾て片脚を失ひたき木ノ假脚を
 作して之を補ひたる者或る村小栗りとて俄小

病小罹てて進退ら小窮き色バ止を得る路傍
 の草舎小這入り葉をきき其上小卧して甚難
 淡の体よ見へたり扱此里の貧き籃匠の娘小
 阿賀佐といへり初き少女ありけり此兵卒の
 様子を見て深く之を憐れ日々彼が草舎小来り
 て其度毎小半ペンス一ペンスハの銀錢を與へ
 たりこの兵卒ハ本律義なり人柄あきバ或る日
 痛く氣遣ひたる体小て少女小云きハ我今日
 始めて貴嬢が親達の貧しく暮し給ふことを聞

けりされバ貴嬢ハいッふして斯く數多の金子
を得たりヤ其实を語を給へよ若し貴嬢ガ本心
の許さる所ふして我小興るものなりバ假令
一文の錢たりとも之を受んよりハ寧ろ餓て死
まら小若トといひまれば阿賀佐の云く其義小
ふゆてハ氣遣ひ給ふ子妾ハ道なき金子を得
たり小非む其仔細ハ妾日々彼方の市街ナリ學
校小通へるガ其行路ハ一叢の森ナリて野生
の覆盆子沢山ナリ妾ハ日毎小其一籃づゝを採

て市街小出へるとき半ペン小賣拂へるナリ妾
ガ兩親ハ之を聞て甚ど喜びつゝ云ふハ世の
中ハ穢よりも猶貪りき人の多クせせば穢ダ
身又叶ふ丈の力を尽して其人を助けざる處ハ
らどと委しく其事を語をけきバ彼の老たる兵
卒ハこそは聞て兩眼より潜然と涙を流し云け
るハ貴嬢ガ仁愛の志いと其善き行ひとふより
てハ帝貴嬢の一身のミヤリバ貴嬢の親達トを
も定めし天の幸福を受べしと此後幾日もあふ

きして高位の吏人阿賀佐が住へる里を過りて
折しも其馬を憇こりんとて旅籠屋の前小
止まりたるを不圖も彼の病る兵卒の話を聞
て其草舎を訪まきたり此時老たる兵卒ハ雑
阿賀佐が恩愛の情不預てたも事を物語まば此
吏人ハ歎息の聲を發し呼貪家の小兒ふして汝
が為小も事甚多きハ何ぞや又我汝が老
將軍小も其為小もこと少きハ何ぞや我
即時命を傳へ此裏の旅籠屋小わけて汝が為

小最上の取扱をなさむべしとて此吏人ハ速
に其言の如く次小阿賀佐が父母の許小至
て阿賀佐の對面しいと喜ばしき体小て云り
ハ可愛き少女よか汝が仁愛の行ひハ余が心と
熱く余が眼を湿せり汝半ペンスの銀錢を老
兵卒小與たり其志小報ひん為す其數
小齊しき金錢を請取るべしと仰りけりバ阿賀
佐が兩親ハ大驚きつりそハ餘り過分なりと
て辞退せりバ吏人の云く否々こハ唯當座の

第三十一卷之上
三十九終

薄き償ひよりせしむ 佳嬢が 治むる 仁愛の志一ハ
ハ又更ふ善き償をも得べきなり 其故ハ彼よく
他人小深切を尽さバ其身小顧て 一點の私欲
なくいと心小屑よく快よけきバなり 元來徳小
報ゆる 誠実の賜ハ人の心小りりて 吾身の外の
利益小ハ何とぞおぼかりと

サトル氏 第三リイドル巻の上終

